

平成21年 5月23日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520401
 研究課題名（和文） 若年層の用いる文末表現形式と音声的特徴にみるバリエーションとその教育的応用
 研究課題名（英文） Study on the variation in Japanese gender-related expressions: from phonetic to sociolinguistic and pedagogical point of view
 研究代表者
 谷部 弘子 (YABE HIROKO)
 東京学芸大学・留学生センター・教授
 研究者番号：30227045

研究成果の概要：

若年層を中心とする「ことばの中性化」が言われるが、男女ともに使われている発話末表現形式も、実際に音声化してみると男女で差が見られ、それは女性が場面ごとに変化に富む韻律的特徴（高さと言長さ）の使い分けをしていることに起因していた。また、このような変化に富む韻律をドイツ人および中国人日本語学習者がどのように聞き取っているか、音声聴取実験をおこなった。中国語母語話者と日本語母語話者の結果を比較したところ、ピッチ（高さ）判定に差が見られた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,500,000	0	1,500,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	540,000	3,840,000

研究分野：日本語教育学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：文末表現、男女差、プロソディ、普通体会話、変異、聴解、日本・中国・ドイツ、国際研究者交流

1. 研究開始当初の背景

若年層を中心とする「ことばの中性化」が言われ、日本語教育の場においても普通体運用上の男女の差異を取り上げる際には配慮が示されるようになってきた。しかし、現実の話しことばでは、文字上では同一の表現形式をとっていても、音声上の特徴を仔細に観察すると、傾向的な男女差が認められる場合がある。

日本語の男女差に関する研究は、おもに社会言語学的な側面から調査研究がおこなわれてきており、言語使用の実態調査からさらに進んで、「女ことば／男ことば」といわれる現実の言語使用とは異なる抽象的な社会的規範がどのような場合に強制力を強めるのか、といった要因解明の必要が指摘されている。また、音響音声学の分野では、近年、音声分析機器や手法の発達によりさまざま

な研究成果があがっている。話し言葉における発話末の表現については、文末詞や終助詞を対象として発話意図とイントネーションの関りについて考察した研究等がある。が、こうした研究の成果が必ずしも日本語教育の現場に生かされているとはいえず、とくに音声面の特徴に関しては、その記述の困難さもあって、聴覚印象に頼った指導にとどまっている状況がある。依然として、ステレオタイプの「女ことば／男ことば」が文字情報としてのみモデル提示されている現状も見られ、時代に即応した教育内容の変化が求められている。

本研究では、普通体会話の発話末表現を柱に表現形式と測定に基づいた音声の特徴を統合的に観察することによって、若年層の話しことばの男女差を再検討し、そこから外国人に対する日本語指導の方法についても再検討を試みる。

近年、大学における日本語教育の対象として、海外協定校からの短期派遣留学生が大きな地位を占めつつある。中国・韓国の学生が大半であった学位取得を目指す正規生や研究生と異なり、日本語日本文化研修留学生を含む学部レベルの短期留学生の場合、国籍も多様で、多くは日本語学習や日本の文化・社会の学習そのものを日本留学の目的とし、同年代の日本人学生との円滑なコミュニケーションを志向している。若年層日本語母語話者の発話末のプロソディ等を仔細に観察し、資料を提供することは、こうした短期派遣留学生の日本語理解を促すうえでも意義あることと考える。

【H18-19年度】

2. 研究の目的

本研究では、ある特定の場面における発話末表現に焦点をあてて、若年層の日本語運用の表現形式および音声的特徴を明らかにするとともに、日本語学習者にとって普通体運用の何が難しいのかを検討し、日本語教育への基礎的な資料を提供することを目的とした。具体的には以下の項目を科学研究費の交付期間内に明らかにした。

- (1) 男女両用の表現形式にもさまざまなバリエーションが存在するが、形式の選択に男女差は見られるか
- (2) 同一の表現形式を使用する場合、音声的特徴（特にプロソディ）に違いは見られるか

また、研究の予備調査として、中国およびドイツにおける日本語学習者がどのような日本語環境にあるか、当地で使用されている日本語教育教材において、ことばの男女差にかかわる事項がどのように記述されている

か、また、それらがどのように運用されているかなど、情報収集をおこなった。

3. 研究の方法

上記課題(1)(2)について、具体的には、男女差で取り上げられることの多い「んだ」が用いられやすい場面、すなわち聞き手に何かを説明する場面のうち【理由説明】【事情説明】の2場面を取り上げ、質問紙調査および実験的手法を用いて分析した。

(1) 質問紙調査：会話文作成

質問紙調査では、「つぎのような場面で、あなたはどのように言うと思いますか。簡単な会話文を考えて書いてください。Aはあなたの親しい同性の友人、Bはあなた自身です。」という設問のもとに、次の2つの場面についてA、B二者間の対話を作成・記述してもらった。

場面1【理由説明】：理由を述べて誘いを断る

場面2【事情説明】：体の不調を指摘され、不調の箇所あるいは原因を説明する

(2) 録音調査：音声表出実験

音声表出実験においても、質問紙調査と同じ2つの場面についてデータを収集した。録音は、(ア)「読み」(イ)「自由会話」の順で行った。

まず「読み」では、場面1、2それぞれのモデル会話を示し、二人一組で役割交代しながら読んでもらった。モデル会話は、若年層の男女が実際に作成した会話(谷部 2000 による)から、表現としては男女差の見られないものを選んで使用した。1場面につき2例、合計4例を調査協力者に示した。疑問符・長音記号など発音に関する情報を含む表記については削除した。使用したモデル会話は[資料]に示す通りである。「読み」に続き、モデル会話に相当する状況で自分たちであればどのように言うかを考えてもらい、表現方法・内容とも自由に会話をしてもらった。厳密な「自由会話」とは言えないが、協力者は自分自身の立場に引きつけ自然なやりとりを展開していた。ここでも役割交代をし、1場面2会話、計4会話を録音した。

以上の調査・実験には、都内の大学で学ぶ19歳から29歳の日本語母語話者110名(男性46、女性64)の協力を得た。

4. 研究成果

上記の会話文作成と音声表出実験によって得た資料・データの分析結果をまとめると次のようである。

結果1：統語レベルの表現形式のバリエーションについては、男女差は見られなかった。

結果2：同一の表現形式を使用している場合、音声として表出した場合の韻律的特徴すな

わち音の高さと長さには、有意な男女差が認められた。特に、女性は場面によって韻律の特徴を使い分けるが、男性にはそのような使い分けは見られなかった。

結果3：男女の韻律的な特徴は、言い淀みや長音化を表す表記にも反映されていた。

結果1について

理由／事情を説明する表現形式としては「んだ」「の」「から」「て」などが用いられていた。その他、「無理だね」「いや」のように理由説明／事情説明の表現形式は伴わないが終助詞等を伴うもの、「バイト」「無理」のような体言止め、形容動詞語幹、終止形などのように理由説明／事情説明の表現形式も終助詞・接続助詞も伴わないものが見られた。ここでは、前者を<無有>、後者を<無無>として類別する。表1は、質問紙および自由会話の場面1および場面2で、それぞれ用いられた表現形式を男女別に示したものである。

表1 各表現形式の観察度数

表現形式	質問紙：場面1		質問紙：場面2		録音：場面1		録音：場面2	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
～んだ	11	34	18	33	20	18	17	20
～の	0	9	0	1	0	4	1	0
～から	7	3	6	1	7	4	4	2
～て・で	1	3	12	27	2	7	10	17
～し	3	0	1	3	2	0	1	0
～かも	0	0	2	6	0	2	0	3
無有	15	11	6	5	3	7	2	1
無無	13	5	5	4	5	4	2	4
その他	3	1	0	1	0	1	1	3
計(度数)	53	66	50	81	39	47	38	50

クラスカル・ウォリス検定およびフリードマン検定によりデータの検定を行ったところ、質問紙の場面1および場面2、「自由会話」(録音)の場面1および場面2のすべてについて、場面要因も男女差要因も統計的に意味のある差を示さなかった。また、各表現形式ごとに χ^2 検定を行ったが、いずれの項目も、自由度1の χ^2 値が1%水準の閾値である6.6349を大幅に下回り、男女で使用に有意差は認められなかった。

結果2について

モデル会話の「読み」データ(男性話者20名、女性話者22名の合計168個の発話)から韻律情報が集中する発話末の2音節を取り上げ、発話末の基本周波数の推移の仕方およびリズムに関与する発話末の持続時間の伸張比率に注目して、別々に分散分析を行った。実験要因は「男女」、「場面」、「例」で、それぞれ2水準である。

図1は、発話末2音節のピッチ差を表したものである。分析対象とした2音節のイント

ネーション末の落差は、平均値で、男性が1音半、女性が半音である。場面別に見ると、男性の場面1では1音半弱であり、場面2では1音と4分の1となっている。一方、女性は場面1でほぼ1音の下降を示すが、場面2では、平均値でマイナス値をとってはいるもののゼロに近い。女性の発話末は単純なステップダウンや下降調ばかりではないからである。

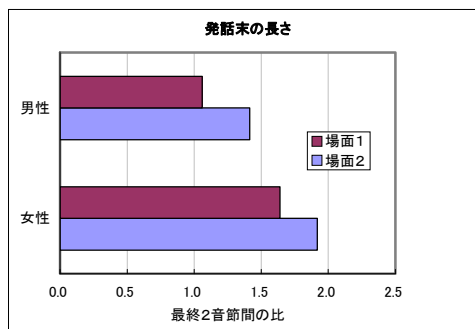


図1 発話末2音節のピッチ差

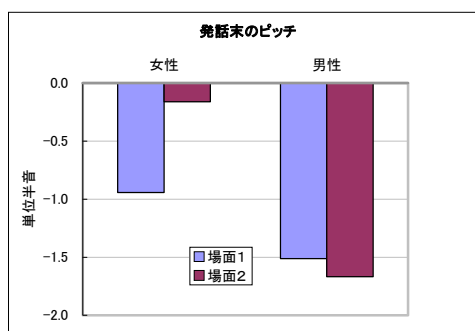


図2 発話末2音節の持続時間長比

発話末の持続時間比に関しても、図2のように女性は男性より比率が大きい傾向を示す。男性話者では、最終音節が先行音節に対して、場面1で1.2、場面2で1.4と、平均で1.29長くなるが、女性話者では、場面1で1.6、場面2で1.9とおおむね80%増になっている。

音響パラメータの統計から、女性は男性に比べて基本周波数の変動でも持続時間制御でも、相対的にコントラストが大きいことが明らかになった。男性のピッチ差と最終音節長の長音化が量的に少ないのに対し、女性はピッチの変動に加えて長音化の度合いが極めて大きい。

結果3について

質問紙の回答には、「…」(三点リーダー)を用いて口ごもったり言い淀んだりする様子を示したものを、長音記号や大小の母音表記によって長音化を示しているものが含まれていた。これらを、言い淀み(…), 長音化(長音記号, 母音表記), 記号不使用の3項

目に分類してみたところ、図3に見るように、どちらの場面でもこうした表記の使用は女性に多く、女性協力者の半数程度がいずれかの表記を用いている。一方、男性の場合は、場面1で53件中12件、場面2で50件中7件にとどまっていた。

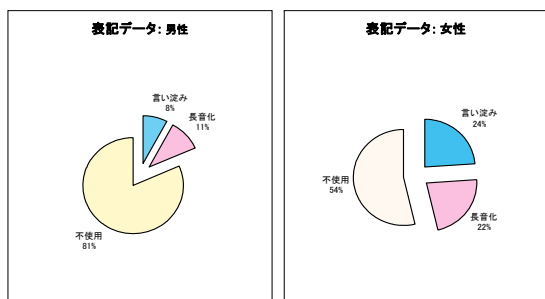


図3 表記の記号使用・不使用の男女別グラフ

場面1、2を合わせて記号の使用・不使用に差があるか、度数データを用いて χ^2 検定を行ったところ、きわめて有意であった。一方、使用した記号の内訳（言い淀み／長音化）について、使用の傾向に差がないか調べたところ、場面1、2とも記号間には男女差は見られなかった。質問紙調査にあたって音声に関する指示は一切出していないにもかかわらず、音声を意識した表記の使用に有意な男女差が見出されたこと、また女性の半数近くが音声を意識した記号を用いたことは、前節の韻律的特徴の男女差を反映する結果と考えられる。

【H20年度】

2. 研究の目的

平成20年度は、発話末のイントネーションについてもアクセント同様に母語の干渉が見られるのではないかという仮説のもとに、林・西沼・谷部（2007）の調査で得た若年層女性の発話から発話末韻律の異なる言語刺激群を構成し、意味を明示的に聞くのではなく物理的な基本周波数の上昇・下降および長短を問う聴取実験を行なった。実験によって明らかにしたい課題は以下の2点である。

日本語の発話末イントネーションについて：

- (1) 日本語母語話者は、物理的に異なる韻律的特徴をどのように聞き取っているのか。
- (2) 日本語学習者は、はたして日本語母語話者と同じように聞き取っているのか。

3. 研究の方法

実験では、同一刺激に対して、ピッチとテンポの判定を求める2つの独立したタスクを課した。ピッチ判定タスクの指示は、「最

終音節が上昇するか／下降するか」、テンポ判定では「最終音節が短いか／長いか」である。協力者は個々にコンピュータのキーボード上の入力キーで回答した。

実験に用いた音声刺激は、林・西沼・谷部2007で使用した音声資料の一部である。具体的には、「授業だから」「大変なんだ」「寝てないんだ」「寝てなくて」という4発話について、それぞれ10人の異なる女性話者の音声刺激を用意した。これらの刺激をランダムに4回繰り返し提示した。したがって、実験プランは、タスク(2)＊発話(4)＊音声(10)＊反復(4)で、各協力者の回答数は320となる。なお、各タスクに先立ち、音声片10個の練習用刺激を提示した。

実験の協力者は、日本語母語話者45名（女性30名、男性15名、学部生および大学院生）、中国語母語話者77名（女性65名、男性12名、日本語専攻の学部生および大学院生）、ドイツ語母語話者45名（女性32名、男性13名、日本語専攻の学部生および大学院生）であった。

4. 研究成果

発話の最終音節が上昇しているか下降しているかという知覚判定を、協力者の母語別に百分率で示したのが図4と図5である。中国語母語話者と日本語母語話者とを比較すると、対比較発話の差すべてが統計的に有意であったが、特に発話3「寝てないんだ」では上昇の判定が多い分下降の割合が減っていることが分かる。発話4「寝てなくて」でも傾向は類似している。

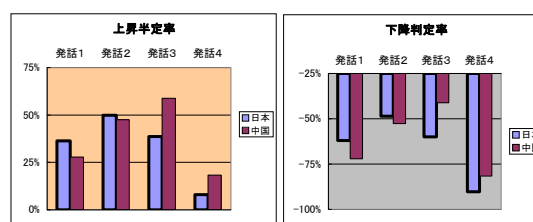


図4 母語別上昇判定率 図5 母語別下降判定率

図6、図7は、母語毎に発話の最終音節が長いか短いかという知覚判定を協力者の母語別に百分率で示したものである。リズムに関しては母語の違いが知覚に関係していないことが図6、図7で読み取れる。これは日中語のペアに見られる偶発的な現象である。しかし、本報告書では詳述しないが、ドイツ語母語話者では、リズム上で母語の影響が観察された。

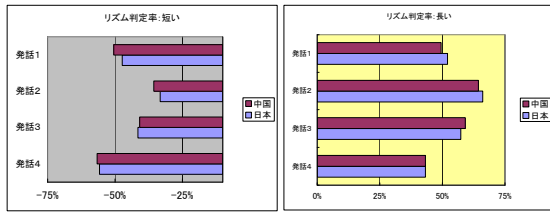


図6 母語別リズム判定率(長い) 図7 母語別リズム判定率(短い)

以上から、日本語母語話者と中国語母語話者とは、発話末イントネーションのピッチ判定に有意な差が見られることを明らかにした。

次に、母語により発話末の韻律の知覚に大きな差が見られた刺激と差が見られなかった刺激例の判定率を示したものが図8である。刺激 Fc03b、Fg10b では、日本語母語話者も中国語母語話者も「上昇」判定はほぼ同率である。それに対して、Fg06b、Fg12b では、中国語母語話者の「上昇」判定は日本語母語話者のそれを大きく上回っている。

これらの刺激を観察すると、Fg06b、Fg12bの周波数変化は人の楽音の上昇検知限以下であり、それにもかかわらず中国語母語話者は「上昇」を聞き取っている。声調言語である中国語を母語とする協力者の耳は、周波数変化の知覚機能が日本語母語話者よりも鋭敏であることがうかがわれる。

一方で、日本語母語話者の「上昇」判定率は高いのに、中国語母語話者の「上昇」判定率はそれほどでもない、という例も見られる。日本語母語話者は「単に高い域にある音」も「上昇する音」も「上昇」と聞いており、中国語母語話者は「高い」と「上昇」は区別しているのではないかと推測される。

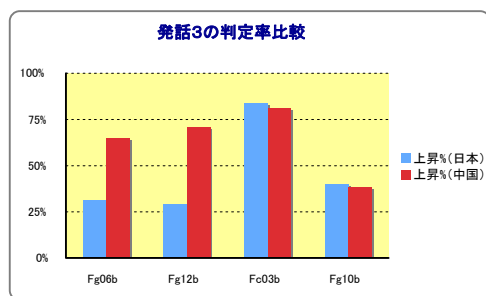


図8 発話3の母語別判定率

以上、本研究では教育現場に基礎的資料を提供することを念頭に、若年層の用いる文末表現形式と音声的特徴にみるバリエーションについて、実験的手法を用いながら明らかにしてきた。

今後は、平成20年度に行なった、第二言語としての日本語の韻律受容の観察をフランス語および韓国語を母語とする日本語学習者にも対象を拡げておこなうとともに、あ

る音声形態が特定の意味と結びつくとき、どのような特徴が見られるか、それらを音響音声学、社会言語学、日本語教育の観点から分析、考察していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 林明子・西沼行博・谷部弘子、2007、若年層男女にみる発話末の表現形式と韻律-説明場面における普通体会話の場合-、社会言語科学、第9巻第2号、30-40頁、査読有り / Hayashi, A., Nishinuma, Y. & Yabe, H. (2007): A Syntactic and Prosodic Analysis of Utterance Final Segments: in Explanation-Giving Dialogues among Young Japanese", Japanese Journal of Language in Society, 9(2), 30-40.

[http://hal.archives-ouvertes.fr/hal-00387568/fr/.](http://hal.archives-ouvertes.fr/hal-00387568/fr/)

[学会発表] (計4件)

- ① Nishinuma, Y., Hayashi, A. & Yabe, H. (2006): "Utterance Final Forms in Dialogues of Young Japanese: A Syntactic and Prosodic Analysis", Speech Prosody 2006 (p59 & CD-ROM), TUDpress, (Dresden, 2-5/05/2006). 査読有り <http://aune.lpl.univ-aix.fr/~fulltext/2749.pdf>
- ② Nishinuma, Y., Hayashi, A. & Yabe, H. (2006): "Parler femme et parler homme en japonais actuel: Formes terminales et indices prosodiques", 26èmes Journées d'étude sur la parole, 97-100, (Dinard, 12-16/06/2006). 査読有り <http://aune.lpl.univ-aix.fr/~fulltext/2751.pdf>
- ③ 谷部弘子・西沼行博・林明子、ことばの男女差を考える-発話末の表現と韻律から、杉田先生退官記念拡大言語学セミナー、2007.11.10、東京学芸大学 Yabe, H., Hayashi, A. and Nishinuma, Y. (2007): "Sex-Specific Speaking Styles among Young Japanese - Difference in Sentence Final Forms and Prosody", Extended Linguistic Seminar in honor of Professor H. Sugita, Tokyo Gakuji University (Tokyo, 10/11/2007). <http://aune.lpl.univ-aix.fr/~fulltext/3243.pdf>

- ④ 谷部弘子・西沼行博・林明子・林洪・冷麗敏、中国人日本語学習者は発話末の韻律をどのように聞いているか—若年層発話のピッチとテンポの聴取実験から—、2008 中国日本語教学研究会年会及び日本語教育・日本語学研究国際シンポジウム、2008。12。12-14、中国・広東外語外貿大学（2008 中国日本語教学研究会年会及び日本語教育・日本語学研究国際シンポジウム 予稿集、広東外語外貿大学・中国日語教学研究会、124-125 頁） 査読有り
[http://hal.archives-ouvertes.fr/hal-00387569/fr/.](http://hal.archives-ouvertes.fr/hal-00387569/fr/)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷部 弘子 (YABE HIROKO)
東京学芸大学・留学生センター・教授
研究者番号：3 0 2 2 7 0 4 5

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

林 明子 (HAYASHI AKIKO)
中央大学・文学部・教授
研究者番号：6 0 2 4 2 2 2 8

(4) 海外研究協力者

西沼 行博 (NISHINUMA YUKIHIRO)
フランス国立科学研究センター・音声言語
研究所・上級研究員

ゴスマン, ヒラリア (GOSSMANN, HILARIA)
ドイツ・トリア大学・文学部・教授

林 洪 (LIN HONG)
中国・北京師範大学・外国語学院・准教授

冷 麗敏 (LENG LIMIN)
中国・北京師範大学・外国語学院・准教授